

日文學習者之文章表現-以學生之日文寫作為例

林紘卉*

摘要

本研究主要探討針對母語為中文之日語學習者，尤其同樣為使用漢字的國家，在漢字的認知及意義解釋上，或日語特有的濁音、半濁音及促音等，在學習日語寫作時，所產生的影響。以 30 名學生為研究對象提出問卷調查，並請學生以日文寫作回答，再以此為資料進行分析以便得知其關係。

根據研究資料顯示，中日皆存在的漢字容易被誤用(如”學系”與”學科”、”時間”與”時期”等)，再者如學習者於初學階段即忽視”促音”或”濁音”等發音，以至於在書寫上容易產生錯誤。

本研究希望能將易產生的錯誤分類，期望可做為日後教學改善的參考。

關鍵詞：日文寫作、作文、母語影響

*美和科技大學應外系專任講師

日本語学習者における文章表現

－日本語学習者の作文を例として－

1・はじめに

本研究では、台湾の大学で日本語学科に進学し、かつ、日本語を学ぶ経験のなかった学生を日本語の未習者の例として取り上げる。具体的には台湾にある大学の日本語学科三年生を対象として調査を行い、基礎資料とする。

日本語の未習者は、平仮名から学習を始める。単語を暗記するとともに、最も簡単な文型（名詞は～です）から学習に入る。学習に進むにしたがって、作る文も長くなっていく。しかし、私の経験では、授業で教えられる文法を活用しようとする、言葉の表現や文法などの問題を含めて間違いの多い文章になってしまうことが多い。

本研究では、日本語学科の学生の書いた文章の誤用分析をもとに、よりよい表現学習の方法について、考察する。

1.1 台湾における日本語教育の現状

日本の芸能界からの流行が届かなかった時代にも、台湾語の中で日本語をしようする現象はすでに存在していた。たとえば、北京語に存在しない「寄付」「注文」という単語は、台湾語で使われ、それぞれ北京語の「捐贈」「訂購」の意味に当てはまる。「運転手さん」のことを「うんちゃん」というのは現在の日本では、あまり耳にしないが、いまだに台湾で使われている。台湾は日本に統治された時代があるので、台湾では日本語は決して珍しい言葉ではない。さらに、近年、台湾のマスコミに、日本のドラマや歌手などがよく登場するようになり、日本語で放送するテレビの放送局も増えてきた。若者の間では日本語は英語に次いで、人気が集まる外国語になり、「哈日族」（日本大好き族）の存在が目立つようになった。また、日本との貿易が盛んになっていることも日本語学習熱の高まりに拍車をかけている。

1.2 日本語教育の問題点

浅井美恵子(2002)は日本語母語大学院生 30 名と日本語能力試験一級に合格している中国語母語話者 32 名を対象として作文の調査を行った。「日本語作文における文の構造の分析」には、以下のような指摘がある。便宜上、原文の番号を(1)と(2)に変えた。(C)は学習者、(J)は母語話者である。

(1)買い物の時、自分が袋を持っていけば、ごみの量が必ず減っていくと思う。(C)

(2)ごみを増やさないためには、再利用可能なモノ、もしくは土へ還るモノを消費すればよいのだが、この時まず障害となるのはコストである。(J)

母語話者の方は、「目的－手段」という論理展開を好んだのに対して、学習者では、「条件－帰結」という論理展開を多く用いていると言える。

中国語では、条件－帰結の展開が多いため、その形を用いて作文を書くが、できた文は日本語としてあまり自然なものとは感じられない。

言葉の習得に母語が影響を及ぼすことは言うまでもないことだが、完全にマイナスの影響だけとは限らない。たとえば、同じ漢字圏の国であるというメリットを持つ学習者は、目標言語(日本語)の単語の意味の理解がしやすいというようなプラスの影響を受けながら、学習していくことができる。吉野文は次のように述べる(吉野文,1999)。

目標言語のルールを理解し暗記するだけでは文法を体系的に習得することは困難である。ルールを内在化し、中間言語の体系を目標言語の体系に近づけるためには、ルールを適用しモニターを働かせて調整していく過程、またそのために目標言語を使用する場面を確保しておくことも欠かすことができない(J.V. ネウストプニー,1997)。

言語の習得には、インプットされた情報とそれをアウトプットできる場面が求められている。インプットされた情報の蓄積を手段として、使用できる場面で応用していくうちに、上達していく。学習者は目標言語のルールを内在化(Internalization)して、リスニング、リーディングといった Receptive skills をインプットした後、スピーキング、ライティングという Productive skills のアウトプットができるようになるはずである。

今までの日本語教育における文法の説明は日本語学の文法に過度に依存していることが分かる。学習者の多様性に応じて、どの部分が最も重要で最初に教えるべきものかなど問題はまだはっきりしていない。また四つの技能によって細かく文法を作るという考え方もある(野田尚史,2004)。

台湾にいる日本語学習者はインプットの授業が多いのに対して、アウトプットの環境には恵まれていないというデメリットがある。学習者に文書や会話を創出する能力を身につけるために、インプットされる場面とそれをアウトプットできる場面を作らなければいけない。

本研究では、母語のマイナスの影響について検討し、インプットに関わる文法をアウトプットに関わる書くための文法にしていく改善を考える。

2・研究方法と考察

2.1 日本語学習者の背景

アンケートの調査の対象者は台湾の T 大学の三年生における日本語学科の学習者約 30 名である。日本語を 2 年学んだ経験のある大学生だが、作文についての学習経験は 1 年のみの学習者である。2 学年の時、週に 2 時間、作文の練習をしていた。その学習者を対象として調査を行った。

T 大の 1 学年の目標はアウトプット(書くこと、話すこと)ができるように準備することにある。アウトプットの技能を上達させるには、インプットを確保する必要がある。2 学年の作文授業が始まる前に、その能力を整えなければならぬ。1 学年の授業内容について、インプットにあたる読むと聞くの授業が非常に少ない。学習者は最初から、インプットに欠かせない聞く練習がほとんどない状況である。

ナチュラル・アプローチの第 1 の原理は、理解(Comprehension)が表出(Production)に先行するということである。つまり聞くこと(または読むこと)の理解がまずあって、その後に話すこと(または書くこと)の能力が生じる(ステイーブン D.クラッシュン&トレイシー D.テレル,1986)。

インプットしたものをより活用できるようにするためには、理解できる内容をインプットしたほうが良い。4 年間にわたるカリキュラムとして、初めの段階に学習者が理解できるインプットの重視、その後、蓄積された言葉のアウトプットの間を作り、活用させる授業の開発をすることなどである。カリキュラムとしてそういったインプットの授業をもっと増やすべきではないだろうか。

2.2 調査の概要

調査概要は次の通りである。

- 1)調査対象：台湾 T 大学日本語学科三年生
- 2)人数：30 名

留意点：

- ・学習者の文章は読みにくいことが多く、母語の影響についても、マイナス影響のみと学習者は思いがちである。しかし、母語の影響にはマイナスの影響もあれば、プラスの影響もある。台湾は多言語社会(北京語、台湾語、客家語、原住民族の言葉)なので、そのメリットを利用して、学習の改善をするために参考になるのではないかと考えられる。また、これまで学習してきた際に、最も支障をきたした問題点も記入してもらった。
- ・会話する際に濁音や促音があまり重視されていない現状があるが、誤った発音をしている学習者がいると予測して、全部の単語に振り仮名を振ってもらうことにした。

2.3 調査の分析

アンケートの記入に際して、北京語または日本語で記入してもらった。但し、「簡単な自己紹介を書いてください」という欄には、短い文章での日本語作文能力がおおむね分かるように、必ず日本語で記入してもらうことにした。記入された内容は以下の通りである。

1. 私は林です。どうぞよろしくお願ひします。20 歳です。T 大学の三年生です。

2. 私はT大学日本語学科の学生です。三年生です。趣味は読書と音楽を聞くことです。一人前の翻訳家になるために、勉強しています。
3. (略)母は主婦です。いつも家のことをきれいに打掃します。私は母のことに感謝します。(略)
4. 私は日本語学系の学生です。(略)
5. (略)日本語の勉強はちょっと難しいです。でも、今まで勉強に頑張っています。
6. (略)もう四年生たけど、も一回習作を勉強しなければならないです。今度真剣に勉強しますけど願います。
7. (略)総長をしたあとで、何仕事をできることは困りました。
8. (略)休日には、ふるさとへ帰ってアルバイトをして、平日は淡水にいます。(略)
9. (略)でも英語もすごく興味を持っていますので、もしかして英語の通訳大学院の入学試験も受けでみたいです。どうぞよろしく願います。
10. (略)家族は父と母と兄と弟があります。父と母は金門で働いています。(略)
11. (略)どうぞよろしく願いたします。
12. (略)日本語が好きですが、日本学科に入って習ぶ。(略)
13. (略)趣味は音楽を聞いたり、映画を見たりことです。ときどき、旅行をしています。

この記入で起こした誤りを概略的に分類した。次のようにいくつかの傾向がある。

1と2のように接続詞を使わず一文が短いのは全体のアンケートを通して一つの特徴である。3の「打掃(掃除)」と4「日本語学系(日本語学科)」は明らかに母語の干渉を受けている。台湾の日本語学習者を戸惑わせる名詞は、日本にいる北京語学習者をも同じ状況に陥らせている。『日本人の間違えやすい中国語』に名詞の間違いが指摘されている(張起旺,2001)。

我希望早日实现自己的梦。

——我希望早日实现自己的愿望。

私は一日も早く、自分の夢を実現させたい。「夢」は「是」「做」の目的語になることはできるが、「实现」「达到」の目的語にはなることができない。

1 夜里我做了一个梦。

夜中に私は夢を見た。

「愿望」はしばしば「实现」「达到.....」の目的語になる。

②她終於实现了自己的愿望。

彼女はついに自分の夢を実現させた。

そのほか、「目標」「目的」、「時間」「期間」などの誤用も多いことが指摘されている。同じ漢字圏の国であるため、単語の意味範疇が一致しないものが

混乱しやすいのではないだろうか。「政治」「椅子」など同じ意味の単語もあれば、「中心」「労作」など意味が異なる単語もある。

5、6、7、8、9は長音や濁音を誤った例である。10は、いくつかの列挙を表す際、「と」の代わりに「、」で区切り、最後の対等名詞のみ「と」を使う場合が多いという日本語の特徴を捉えていない例である。また「いる、ある」に関する誤用もある。11、12、13に動詞の送り仮名、表記、音便の問題が見られる。

「日本語作文を書く際、難しく感じる点を記入してください」の欄に、学習者は日本語や北京語で記入した。北京語の部分は()内に日本語訳を示し、日本語の部分は書かれたままで示す。

1. うまく表現できない。中国語に対応する日本語とか、慣用表現法とうまく表現できない。
2. 背的單字太少，所以常常要查字典。另外，母語干擾的因素也有，常常句型都是按照中文直接翻過去的。(覚えた単語が少ないから、よく辞書を引いている。また、母語の影響を受ける要因もある。いつも北京語の文型のままで日本語に直訳する。)
3. そうですね、外国人の私にとって、外来語が一番難しいと思います。意味もよくわからないし、外来語の長音どか、濁音どか、よく間違っていました。
4. 覚えた単語数も足りないし、自分が言いたいこともうまく表現できないと思います。
5. 需要的單字有時會忘記寫法跟拼音，也不能很完整的寫出想要表達的意思。(単語の書き方と綴りをときどき忘れる。また意味を伝えることができない。)
6. うまく表現できない、日本と台湾のことばの違う表現方式。
7. 字彙認識的不夠多，所以文字的表達也不完整。助詞的用法偶爾也會錯誤。(語彙が足りないので、うまく伝えることができない。助詞の使い方もときどき間違える。)
8. うまく表現できない。有時也常常覺得自己所學的句型或單字不夠多，以至作文都寫不好。(うまく表現できない。学んだ句型や単語が多くないと思うので、作文をうまく書くことができない。)
9. いい文型が少ししかわかりませんから、書くとき、うまく表現できないことに大変悩んでいます。ほかには、語感の方にも問題があります。

単語数不足と慣用表現に対する戸惑いが最も大きな割合を占めている。その他、両言語に表現の相違、句型、母語の干渉、外来語、助詞などの問題点が学習に支障にきたすこともある。読み手に意味の伝達ができないことに大きな悩みを抱えているようである。語感(ニュアンス)を把握できず、たとえば、「食べる」と「食う」の違いなどが分からない。それを身につけるため

には、「正しい語感を育てるには常に正しい言葉に接してゐるのが一番である。さうして、不正なものに出會ったらすぐにそれを嗅ぎ分けうるやうになってゐなければならぬ」というように、経験の積み重ねしかないとする見解もある(興水実,1942)。言語習得に対する動機付けを強化するために、読書が重要性であることを認識させ、初心者の段階から本に接する習慣を持たせ、ある程度の量が蓄積されれば、正しい語感が培われると考えられる。

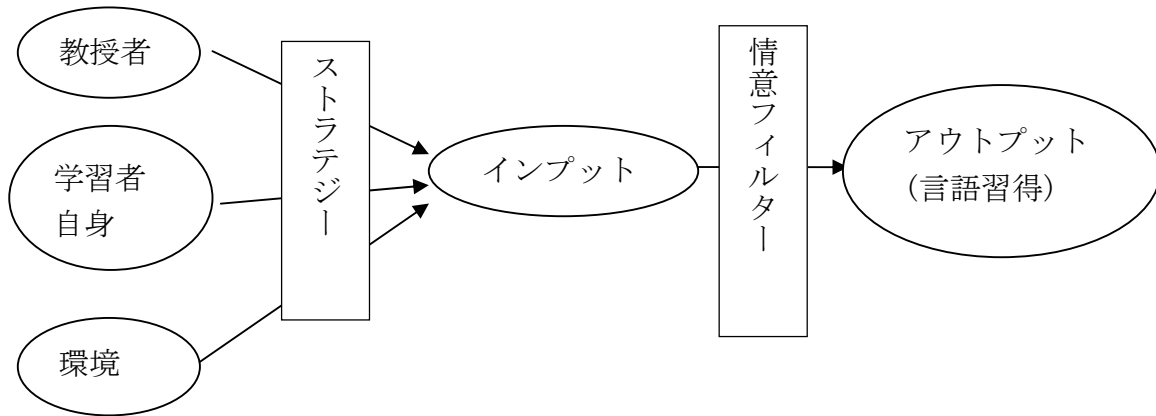
台湾では地域、年齢層などの要因により、北京語、台湾語、客家語、原住民族の言葉、日本語が使われる。さらに学校での英語教育が進んでいるので、多言語社会と言っても過言ではない。家庭と学校で異なる言葉を用いるのが普通なので、一人が二つの言葉を使うことは珍しいことではない。そのような環境で育った学習者の言語情報について見てみると、「日常生活で使っている言葉」は北京語が最も多い(北京語 22 人、台湾語 11 人、英語 1 人)。「話すことができる言葉」の欄に台湾語を記入した学習者は 28 人である(北京語 15 人、英語 11 人、客家語 1 人)。台湾語と北京語における発音はずいぶん異なるので、その点から考えてみれば、日常使う言葉のほかに、台湾語も話すことができるということは、日本語の習得にマイナスやプラスの影響を与えるのではないかと考えられる。

読書、文の模倣、例文の暗記などを自分で工夫をしたこととして記した学習者も多い。学習者は単語や文型などのインプットを得るため、教室外で本、雑誌、インターネット、辞書などの手段を使っている。しかし、辞書だけに頼るという戦略は文脈による単語の意味推測能力の活用を防げるので、注意しなければならない。暗記や模倣の戦略は最も用いられている。記憶戦略に関する説明は以下の通りである。

記憶戦略：「練習」というアクティビティーが挙げられる。練習の中には、リピートする、再編成する、拡張する、新しい環境で使ってみる、スピードを速める。記憶戦略のもう一つのグループは、記憶以外の領域と関係を作って、そのまま記憶に記録するという手続きである。たとえば、漢字の形を象徴のように考える、連想をする、他の言語と比較する。多くの学習者が新しく習った題材を意識的に「覚えるために」すぐ使ってみるという手続きである(J.V. ネウストプニー,1999)。

穴埋め式の学習形態が支配的な教育を受けてきた学習者は、他人と関わらず、一人で行える暗記という戦略を使う傾向がある。学習戦略がどこから生まれてくるかに関しては、①教授者から②学習者自身から③環境からの三つが代表的なものとしてされている(J.V. ネウストプニー,1999)。戦略を使い獲得したインプットは、さらに学習者自身の情意フィルターの働きによってどれほどのものを蓄積できるのかという問題があり、その結果としてアウトプットにおける言語習得の達成度が表れる。学習者は教授者や自身、環境から得たインプットを戦略として使っ

て習得しているものと考えられる。図 1 の順序で言語の獲得が行われると考えられる。



〈図 1〉 言語習得順序

3・結果と今後の課題

学習者は語学講座に通ったり、辞書を引いたり、例文を模倣したりなどのストラテジーを用いているが、言語のインプット段階で止まってしまう、アウトプットに結びつかなかったのである。次の段階に進むストラテジーがほとんど見られない。ニューストプニーがいうように、「コミュニケーション能力に必ずしも依存しない、豊かな社会的なインターアクションがまずあり、そこにコミュニケーションの必要が生じ、それが言語能力の獲得につながるというこもある」わけである(春原憲一郎,1999)。

ストラテジーは、①教授者②学習者自身③環境からである。学習者には良い例文を模倣した後、新たに創出する練習が求められているようである。それは学習者自身のストラテジーとしても行われている。教師に依存すれば、言語の習得が十分にできない。「教えれば流暢に話せるというものではなく、第 2 言語ですらすら話せるようになる力は、インプットを通じて十分な能力を習得した後ではじめて自然に表出してくる(Emerge)ものである」と指摘されている(スティーブン D.クラッシュエン&トレイシー D.テレル,1986)。学習者自身のインプットはやはり重要である。その後、アウトプット、場面の確保、たとえば、日本語で話したり、作文を書いたりといった練習が必要になる。

中学校から単語を覚え始め、大学に進学した後、文法を習う学習者は、他の学習者より自然な文を書くことができる。授業外の時間に良い文章を暗

記したり、模範的な文を写してみたりする工夫も凝らしている。文章を読めば読むほど、見慣れない単語が知らず知らずのうちに身につく、学習環境のデメリットを改善することにつながるだろう。

海外にいる学習者にとっては、その環境を日本にいる学習者の環境と比べられるものではない。海外学習者は自分自身が日本語の環境を作らなければならず、日本の音楽を聴いたりしての情報を集め、周りの環境を利用して努力するしかない。今後、学習者に相応しいカリキュラムを作ることを検討したい。

参考文献

- 吉野文(1999)、「文法的ストラテジー」。宮崎里司 J.V. ネウストプニー共編、『日本語教育と日本語学習』, 84, くろしお出版。
- 浅井美恵子(2002)、「日本語作文における文の構造の分析」, 『日本語教育』, 第 115号, 55-56。
- 春原憲一郎(1999)、「学習ストラテジーとネットワークキング」。宮崎里司 J.V. ネウストプニー共編, 『日本語教育と日本語学習』, 186, くろしお出版。
- 宮崎里司 & J.V. ネウストプニー(1999)、『日本語教育と日本語学習』, 8, くろしお出版。
- 野田尚史(2004)、『日本語教育のための文法』, 13, 社団法人日本語教育学会。
- 張起旺(2001)、『日本人の間違えやすい中国語』(児玉充代訳), 24, 国書刊行会。
- 興水実(1942)、『日本語教授法』, 235, 国語文化研究所。
- スティーブ D.クラッシュエン&トレイシー D.テレル(1986)、『ナチュラル・アプローチのすすめ』(藤森和子訳), 20-21, 大修館書店。
- J.V. ネウストプニー(1997)、『阪大日本語研究』, 9号, 1-15, 大阪大学文学部日本語講座。

The Performance of Japanese Articles

— Written by Japanese Learners

Yun Hui, Lin*

Abstract

This research aims at the Chinese students who are learning Japanese, to learn the problems they may have when they learn to write Japanese articles, especially Chinese characters are frequently utilized in Japan but some appear to have different meanings, and also there are the unique pronunciations that only exist in Japanese. This research will focus on studying those effects on the students' recognitions and the meaning explanations of those particular Chinese characters and unique Japanese pronunciations. Thirty students will conduct the surveys of questionnaires with Japanese writing. The data will be analyzed to understand those effects.

According to the literature review, the Chinese characters that used in both countries are easily confused with their meaning, for instance “subject” and “major study” or “time” and “period”...etc. Even more the early Japanese learners often neglect the pronunciations of similar vocabulary. That negligence of pronunciations results in mistakes on writing Japanese articles.

This research aims to categorize those that the same words with different meaning in two different countries and the negligence of pronunciations resulting in wrong Japanese writing. In the future, we are hoping to improve the teaching with the research results.

Key words: Japanese article, composition, native language influence

* Instructor, Department of Tourism, Mei-Ho University

